

ミステリ読書案内

2024. 9. 25 発行元

第606号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

阿津川辰海「バーニング・ダンサー」

7月に角川書店から阿津川辰海の『バーニング・ダンサー』が出た。「本格謎解きミステリ」の新しい書き手として期待されている作者の最新刊。期待を膨らませて読んでみた。新たな挑戦とも受け取れるのだが…。

今回は「警察小説」??…

本作は『小説野性時代』に連載されたもの。帯には「最高峰の謎解き×警察ミステリ」と記されている。「警察小説」は私の好きなジャンル。どんな風に仕立てたのかが気になった。「来た。怒濤のドンデン返し。」とも書いてある。これは阿津川らしさの現れだと受け止められる。という事で、いざ読み始めた。

物語の主人公は永嶺スバルという警視庁捜査一課の刑事。でも、新設された「コトダマ犯罪調査課」に移動することになる。ここから特殊な設定に入っていく、通常の「警察小説」からは外れてしまう。

「コトダマ犯罪調査課」とは…

本書の一番のクセモノなのはこの「コトダマ」の部分。世界に百人だけいる特殊能力の持ち主のこと。本書の中心になるのは「燃やす」能力を持ったコトダマ遣い。この「燃やす」コトダマ遣いがテロを計画しているらしい。それを阻止しようと

する流れなのだ。永嶺は「入れ替える」コトダマ遣いの能力を持つ。他に六人のコトダマ遣いが警視庁に集められて調査課が組織される。善のコトダマ遣いと悪のコトダマ遣いの対決の構図なのだ。

調査課のメンバーの一人、望月知花は「聞く」のコトダマの遣い手なのだが、どんな条件の時に能力を発現することができるのか、また、具体的な「聞く」内容はどんなものなのか…わからないことだらけ。コトダマの中身が曖昧過ぎてなおかつ複雑。推理もこの条件を踏まえてなので、読み手も混乱しないようにしなければならない。

誰が何を隠しているのか…

登場人物のそれぞれが何かを隠しているように描かれているので、そこがまた先を読めなくしている。結末のドンデン返しに結び付けてくる要素と言えるが、読者はどの部分もおろそかにできないので、読むスピードが鈍る。後半の対決の場まで行き着けば一気に進めるけれど

阿津川辰海・作品リスト

1. 名探偵は嘘をつかない
2. 星詠師の記憶
3. 紅蓮館の殺人
4. 透明人間は密室に潜む
5. 蒼海館の殺人
6. 入れ子細工の夜
7. 録音された誘拐
8. 午後のチャイムが鳴るまでは
9. 黄土館の殺人
10. バーニング・ダンサー

も前半はやや重い。

総じて「コトダマ」の設定が納得できる部分と納得できない部分が残る。ドンデン返しもここまで必要もないような気が…。そして、完全な決着を付けられないまま残してあることも…。この話はシリーズものになるのだろうか。

特殊設定の「本格もの」

最近の「本格もの」はよく特殊な設定の中での「推理・論理」が登場してくる。本書でも作者が独自に設定した「コトダマ」の本質を理解しないと前に進めない。まあ、現実の世界ではありえない出来事なので。そんな意味で本書は「良くできました」まではいっていないような気がする。もう少し絞って、読者が「なるほどそうか」と思える展開にしてもらえると有難い。

鴨崎暖炉「密室偏愛時代の殺人」

7月に宝島社文庫から出た本。副題は『閉ざされた村と八つのトリック』。『密室黄金時代の殺人』『密室狂乱時代の殺人』に続くシリーズ第三作。題名の通り「密室殺人」の連続で、そのトリックの想像力に圧倒される。今回は「八つ箱村」が舞台で、出てくる人物のほとんどが密室ミステリー作家という設定が笑わせてくれる。

「八つ箱村」は巨大な鍾乳洞の中に作られた特殊な村で、物柿家という大富豪が巨額を投じて作り上げた人工的な建物群から成っている。東の集落には大きな箱の中に物柿家の屋敷があり、巻頭にその見取り図も示されている。「箱」には意味合いがあり、屋敷の構造もトリックに直結しているのは当然のことか。その「八つ箱村」に紛れ込んでしまったのが高校三年生の葛白香澄。途中から名探偵役の同級生・蜜村漆璃も登場する。物柿家の現在の家族、九人兄弟は皆ミステリー作家で、そのメンバーが順次密室の中で殺されていく流れになる。鴨崎作品の特徴で、密室のトリックは早い段階から謎解きが始まり、解説がつけられていく。物語の大半が密室の「解決編」みたいな構成になっている。前二作にも増して今回の密室の仕掛けは綱渡りで、なおかつ想像もつかないくらい大がかり。「本当にこれが可能なのか？」と思うものばかり。ちょっと納得がいかないものも…。でも、「作り物の面白さ」は満点である。ここまで徹底してくれる作者のサービス精神に感謝。